

勤務医部会だより

西部医療センター

“誕生後の5年とこれからの5年”



幹事 鈴木 悟

(名古屋市立西部医療センター 院長)

一昨年の平成27年4月1日付で名古屋市立西部医療センター病院長を拝命いたしました鈴木でございます。病院長という大役を拝命し、その重責に身の引き締まる思いで現職に就いた後2年が経過し、“センター誕生後の5年とこれからの5年”について考えてみました。

当院は平成23年5月1日に名古屋市立城西病院と城北病院が合併する形で誕生した、地上8階/500床の急性期型病院です。勝見康平初代院長のもとと第一歩を踏み出しましたが、開院当初は諸事情で病棟がフルオープン出来ず、それでも院長以下スタッフ全員が一丸となり、また病院局の皆さまのご協力もあり、無事船出を成功させることが出来ました。その後、田中宏紀前院長（現東部医療センター病院長）が舵取りを引き継がれ、積み残していた課題を次々クリアされた結果、2年前の平成26年度からは経常収支が黒字となりました（26年度4.4億円、27年度8億円の黒字）。これも偏に病院局をはじめ愛知県下の関連病院の皆様のご支援の賜物と厚く御礼申し上げます。

当院の特色は、「女性と子どもにやさしい病院」「がん医療を支える病院」です。小児医療センター、周産期母子医療センター、消化器腫瘍センターを三本柱とする総合病院としてスタートした後、東海三県唯一の施設である名古屋陽子線治療センターがオープンし、着実に治療実績を伸ばしています。中央診療部門としては緩和ケア医療部、遺伝診療部も開設して、さらに平成27年1月からは脊椎センターが、4月からは呼吸器腫瘍センター、放射線診療センターを新たにオープンすることが出来ました。同時に県のがん診療拠点病院にも認定されました。また平成25年9月からは地域医療支援病院に、平成27年5月からは重症心身障害児者施設「ティンクルなごや」

も入所を開始し、名古屋市の一大プロジェクトであった医療と福祉の総合エリア「クオリティライフ21城北」がついに完成したのです。オープン後の5年は今から思うと各方面の皆様の頑張りにより右肩上がりの成績を残すことができ、まずは順調なスタートを切ることが出来たと思います。本当に有り難うございました。

ただ厚生労働省が掲げる「地域医療構想」によれば、各医療機関は2025年までには高度急性期、急性期、回復期、慢性期型病院として病院の進むべき方向性を打ち出さねばなりません。私たち西部医療センターも、これから2020年までに病院の進むべき方向性を打ち出さねばなりません。「小児・周産期医療とがん医療」を“看板”にセンター化を推進する当院は、現段階では高度急性期、急性期型病院を目指す所存でございます。世の中は“TOKYO 2020”と沸いていますが、私たち病院経営者はオリンピックに浮かれること無く、2025年に向け「地域医療構想」を粛々と進めて行かなければなりません。

これからの5年に向け、まずは体制作りです。昨年4月からは戸荻 創前名古屋市立大学学長を西部医療センター長としてお迎えすることが出来ました。臨床のみならず、大学と協力しながら研究・教育にも貢献していく必要があります。また私個人としては開院以来目指している目標が2つあります。第1は“SBP”計画です。S：西部医療センターを、B：ブランド化する、P：プロジェクトです。名古屋市立病院としてスタートした当院を、名古屋市から全国区の病院に伸ばしていく計画です。第2は、患者さんが当院に通院される理由が、疾患を治す「手段」ではなく、当院に来たいという「目的」となってもらえる病院になることです。スタッフ全員がアイデアを出し合っこの目標を達成して行きたいと考えています。

皆さま方のご支援、ご協力を宜しくお願い申し上げます。